小学校における英語活動
－英語を楽しみながら使おうとする意欲や態度を育てる活動の工夫－

上富田町立朝来小学校
教諭　　兼久　美嘉

１　研究のねらい

国際化が急速に進む中、異なる文化を持つ人々との交流を進めていく上で、コミュニケーションへの意欲や積極的な態度は欠かせないし、このとき、コミュニケーションの手段の多くが英語である。英語は世界共通の言語として広範囲で使用され、子どもたちにとっては日常生活で比較的よく見聞きしているため、親しみを持ちやすい外国語である。

小学校の総合的な学習の時間の中では、国際理解に関する学習の一環として外国語学習、主に英語活動が積極的に取り入れられるようになってきており、本校では今年度より英語活動に取り組んでいる。

英語活動は、英語に慣れ親しむことを目標としているため、「聞くこと」「話すこと」といった音声を中心とした体験的な活動で構成されていることが特徴の一つである。英語に触れて（聞いて）、まねて、発話するといった自然な流れを大切にすれば、英語嫌いを作らず、楽しさの中で英語に慣れ親しむことができると考える。そのために、教材や活動をどのように工夫すれば、子どもたちが楽しみながら英語を使ってみようとする意欲や態度を育てられるかということを研究のねらいとした。

２　研究仮説

子どもたちが楽しいと思う英語活動は、子どもの興味・関心や実態に応じたものである。実態をよく把握した担任が､子どもの興味・関心に即したカリキュラムを作り､その上で学習の様子を観察し、工夫を加えながら活動を進めていけば、楽しみながら英語を使ってみようとする意欲や態度を育てることができると考え､次の研究仮説を設定した。

小学校の英語活動において、単元での一連の授業を通し、子どもの興味・関心、実態に応じた題材を選んで、活動方法を工夫すれば、英語を楽しみながら使おうとする意欲や態度を育てることができるであろう。

３　研究の内容と方法

(1)　研究の内容

独協大学外国語学部教授の阿部一氏によると、小学校段階の子どもは、英語活動の際に物事をあれこれ詮索することなく､イントネーションやアクセント等はもちろん、自然な形で丸ごと英語を覚えていく傾向があるということである。氏はさらに、特に音に関わることや体を使った活動、例えば歌やチャンツ（注１）等を好むことが特徴であるとも述べている。(注２)

一般に３年生頃の子どもは、知識欲が盛んになり、いろいろなことをやってみたいと感じる。一方で、一つのことに長く執着しにくい傾向があると言われている。また、集団の意識が非常に強く、競争意識が生まれてくる時期であり、大きな声でリピートしたり、体を動かしたりといった活動を導入しやすい。

このような小学３年生児童の発達段階を踏まえて、題材の選定及び活動方法の工夫を行った。

題材の選定にあたっては、家庭や学校生活に即した日常的なもの、あるいは子どもの興味・関心の高いものであることに加えて、次に示す(ｱ)～(ｳ)のような特徴を持つ教材を設定した。

(ｱ) 子どもたちにとってなじみがある言葉や内容で構成されていること。
(ｲ) 他教科との関連があり、子どもの知的好奇心に訴えること。
(ｳ) 自己表現につながること。

＜教材例＞

○「好きな果物」　…(ｱ)の要素より
果物の名前は英語から日本語に定着したものが多い。

○「The Black Cat Song」（歌）　…(ｱ)の要素より
子どもにとって身近な言葉と色で構成されている。

○「THE VERY HUNGRY CATERPILLAR（はらぺこあおむし）」(紙芝居)　…(ｱ)及び(ｲ)の要素より
絵本が広く普及しているとともに、食べ物や曜日など子どもの日常生活に密着した言葉が多く登場する。３年生理科で関連した内容を既習。

○「私は誰でしょう」　…(ｲ)の要素より
洋服の種類や色について聞いたり、話したりする。２年生国語で同様の内容を既習。

○「生き物大好き」　…(ｲ)及び(ｳ)の要素より
虫について自分の好き嫌いを表現。３年生理科で関連した内容を既習。

また、活動方法の工夫については、子どもが緊張感をあまり感じることなく、英語活動への意欲を持ち､楽しみながら英語を使うことができるということを念頭におき、次の(a)～(e)の要素をもとに下に示す活動を取り入れた。

(a) 英語に慣れ親しみ、定着をはかる活動として、英語特有のリズムや強弱を伝えるために、体を使った活動や、チャンツ等を取り入れる。
(b) 楽しむ活動として、歌やクイズ、ゲームといった遊びの要素を加える。
(c) 使う活動として、友達といっしょにできる問題作りなどのコミュニケーション活動を取り入れる。
(d) グループ活動やペア活動を取り入れる。皆の前で一人で発話する際の緊張感を緩和するなど、子どもの負担を軽くし、のびのびと活動させる。
(e) ネイティヴ・スピーカーとのふれあいを生かす。

＜活動例＞

○フルーツバスケット　(「好きな果物」)　…(a)及び(b)の要素より
英語活動の初期に、子どもたちにとってなじみのある言葉を使い、よく知っている活動を行うことにより、ウォームアップの効果が得られる。「英語はむずかしくない」「英語を使うことは楽しい」というように緊張感の緩和を図ることができる。

○歌を歌う（聞く）活動　(「The Black Cat Song」)　…(b)の要素より
授業の始めに身振り手振りを加えて大きな声で歌わせることにより、子どもの緊張感を緩和し、英語を話すことの活性化が図れる。また歌の CD を用い、ただ単に聞くのではなく、聞こえた色をシートに塗る活動を行う。この活動により、目的意識を持って集中させ、楽しみながら英語特有のリズムや音を聞き取らせることができる。

○紙芝居　(「THE VERY HUNGRY CATERPILLAR」)　…(b)及び(c)の要素より
紙芝居を使ってまず読み聞かせを行い、次にそこに出てくる言語材料を用いて活動を行う。授業で扱う言語材料と関連させて、導入や復習など、色々な場面で利用し、子どもたちの言語体験の機会を増やす。

○問題作り活動　(「私は誰でしょう」)　…(c)及び(d)の要素より
知っている英語を使って、問題のヒントを作り、それを伝え、答えてもらう活動である。その際には、子どもの負担を考えて、４～５人のグループで行わせる。

○ＡＬＴとのはじめての出会い　…(e)の要素より
ALT との関わりの中で、英語であいさつをし、握手をしながら一人ひとりが直接名札を受け取る。また英語活動をいっしょに楽しむことを通して、異文化を持った人と、物怖じすることなく親しく関わろうとする態度を育てることができる。

上で述べた教材や活動を使い、計８時間の授業計画を立て、仮説の検証を試みた。

(2)　検証授業について

ア　日時　平成16年10月25日～11月８日

イ　学級　上富田町立朝来小学校　３年１組　（男子13名　女子15名　計28名）
　　３年２組　（男子13名　女子15名　計28名）
　　３年３組　（男子13名　女子15名　計28名）

ウ　単元　英語で遊ぼう

エ　単元の目標

・英語や異文化に興味・関心を持ち、慣れ親しむ。
・身近な事柄や日常生活の場面などを取り上げた英語を聞いたり話したりする活動の中で、進んで英語を使おうとする。
・友達と関わり合い、認め合う中で、コミュニケーションを楽しもうとする。

オ　指導計画（全８時間）

	題材	英語表現	学習活動	指導者
第1時	はじめまして	Hello. Nice to meet you. How are you ? 〈I'm fine.〉 (great, tired, hungry)	・ガイダンス　・アンケート（事前調査） ・ビデオ（えいごリアン）視聴　・あいさつゲーム　・歌「London Bridge」	HRT
第2時	好きな果物	Here you are. 〈Thank you.〉 What fruits do you like ? 〈I like apples.〉 (strawberries, pears, oranges, watermelons, cherries, plums)	・あいさつ　・ALTとの出会い ・ALTの自己紹介 ・フルーツバスケット ・まとめ ・ふりかえり	HRT ALT (TTでの指導)
第3時	生き物大好き	Do you like spiders ? (caterpillars, butterflies, mantises, grasshoppers) 〈Yes. No.〉	・あいさつ　・歌「London Bridge」 ・紙芝居の読み聞かせ①（これは何かな？）　・インタビューゲーム ・まとめ　・ふりかえり	HRT
第4時	体を使って遊ぼう	Touch your head. (shoulder, knee, toe, eye, ear, nose, mouth) Let's walk. (run, swim, fly, jump, stop, kick, sit down, stand up)	・あいさつ ・歌「Head,Shoulders,Knees and Toes」 ・紙芝居の読み聞かせ②(好きな果物) ・サイモンセズゲーム ・まとめ ・ふりかえり	HRT
第5時	色で遊ぼう	I have something red. (blue, yellow, green, pink, gray, orange, white, black, brown, purple) What is this ?〈(It's a) watermelon.〉	・あいさつ ・歌「The Black Cat Song」（ぬり絵） ・紙芝居の読み聞かせ③(クイズビンゴ) ・まとめ ・ふりかえり	HRT
第6時	私の洋服	I have a blue shirt. I have red shoes. (skirt, socks, pants, hat, cap) Who am I ?〈(You are) Tomoko.〉	・あいさつ ・歌「The Black Cat Song」 ・クイズ「私は誰でしょう」 ・問題作り　・まとめ　・ふりかえり	HRT ALT (TTでの指導)
第7時	動物大好き	I like rabbits. I don't like snakes. (elephants, frogs, tigers, birds)	・あいさつ ・歌「Head,Shoulders,Knees and Toes」 ・紙芝居の読み聞かせ④（私は何でしょう）　・カード集めゲーム ・まとめ　・ふりかえり	HRT
第8時	私は何でしょう	I'm small. (long, strong, big) I'm white. (green, yellow) I jump. I have long ears.など What am I ? 〈(You are a) rabbit.〉	・あいさつ ・歌「Head,Shoulders,Knees and Toes」 ・ブラックボックスクイズ「私は何でしょう」　・問題作り　・まとめ ・ふりかえり　・アンケート（事後調査）	HRT ALT (TTでの指導)

＊紙芝居は「THE VERY HUNGRY CATERPILLAR」を使用

カ　評価

本単元における評価は、子どもの学習状況をより正確に把握し、学習意欲を向上さ

せることが主たる目的である。各時における評価規準については、子どもの関心・意欲・態度等に重点を置いて、次の４点を設定した。

① 興味・関心を持って活動に参加している
② 英語を聞こうとしている
③ 英語を話そうとしている
④ 活動に取り組む中で自分の良さに気づき、友達の良さを見つけようとしている

ここでは次の３つの方法で評価を行う。評価結果は、指導者自身の授業改善に役立つとともに､子どもたちの英語活動での変容を把握することにつながると考える。

(ｱ) 個別の観察評価

今回の指導目標は「英語を楽しみながら使おうとする意欲や態度を育てる」であるため、活動の中で子どもが、学んだ英語をどの程度積極的に使おうとしているかについて、子ども一人ひとりを観察していくことが必要である。そのため、活動の締めくくりとして、子どもと個別に対話する機会を作り、英語を使う（聞く・話す）意欲や態度を観察する。このとき、ほめることで、意欲をさらに高めていけるようにする。

(ｲ) 自己評価

子ども自身に自分の活動を見つめさせることにより、意欲や学習の見通しを持って取り組ませたい。活動のふりかえりとして、授業の終わりに自己評価を毎時間行う。自己評価シートは、子どもが負担なく記入できるよう、できるだけ簡単なものとする。

(ｳ) 他者評価

グループ活動やペア活動を行う際には、他者評価も活動のふりかえりとして取り入れたい。互いの良さを認め合う中で、自分の良さにも気づくことができ、励まし合うことで、英語活動への意欲も大きくなると考える。今回はシートを用いて、友達の良いところを書かせるようにする。

４　研究結果の分析と考察

(1) 指導の工夫が効果的であったかをふりかえる

本研究で授業づくりの中で工夫した点について、子どもの学習活動での様子やふりかえりカード及びアンケートをもとに、次の２つの視点から分析を行い、考察する。

ア　子どもが楽しめる教材や活動、授業展開であったか。
イ　英語を使おうとする意欲や態度を育てられたか。

ア　子どもが楽しめる教材や活動、授業展開であったか

(ｱ) 紙芝居の読み聞かせ及びそのヴァリエーションの工夫

「THE VERY HUNGRY CATERPILLAR」の読み聞かせを４回行った。

１回目は読み聞かせだけを行った。その結果、ほとんどの子どもが「(内容が)だいたいわかった」と答えており、94%の子どもが「とても楽しかった」と答えている。今回使用した紙芝居「THE VERY HUNGRY CATERPILLAR」の内容は虫の成長として理科で既習している。またその中で使われている言葉などが子どもたちにとってなじみのある教材であったことも理解につながったと考える。

２回目になると、紙芝居の読み聞かせに対しては「とても楽しかった」と答えた子どもの割合は80%に下がったが、読み聞かせと合わせて行った「スピードインタビュー」などの活動に対しては94%の子どもが同様に答えている。この結果から、読み聞かせは回数を重ねると理解しやすくなる反面、聞くだけでは物足りなくなる子どもも出てくることがわかった。３回目には、読み聞かせと合わせた活動として、そこに出てくる単語を使った｢クイズビンゴ｣を行った。その結果、

100％の子どもが「とても楽しかった」と答えた。４回目には、絵を隠して“What is this?”の質問に答える活動と合わせて行ったところ、「とても楽しかった」と答えた子どもの割合は94％に上っている。

感想には、「紙芝居を英語で話してみたい」という声もあり、単に受け身的に「聞く」だけでなく、能動的に「活動する」ことを子どもは望んでいると思われる。このように、読み聞かせを行う際にも、いろいろな活動と組み合わせることが、子どもの興味・関心の持続に有効であった。

(ｲ)　言語活動を促すグループ活動やペア活動の導入

英語活動が楽しくできた理由として、「みんなでできたのがうれしかった」ことを挙げた子どもが16％いた。また毎時間のふりかえりカードには子どもどうしの活動について「楽しかった」という感想が多く見られた。

特に第５時の紙芝居を使った活動は、子どもたちに大変人気があった。これは色の名前を用いて“I have something red. What is this?”で質問し合うビンゴゲームである（写真１）。第４時までと比べて、今回は、話した相手の人数が倍近くにまで増えた子どもがほとんどであった。ゲームの中で何回も繰り返し聞き、話すことで子どもたちに自信がつき、楽しさも増していったようである。

写真１　楽しいビンゴゲーム

この活動は新しい英語表現を含んだゲームであった。しかし、アンケートでは文の難しさにもかかわらず、「新しい英語表現を知ること」「話すこと」について、「とても楽しい」と感じた子どもが期間中で最高値の95％を示した。このことから子どもは楽しいと感じる時には、少々難しいものでも、何とか覚えて英語を使って相手に伝えようと意欲を持って取り組むことがわかった。

グループ活動については、「グループでゲームをしたのが楽しかったです」という感想が大半であった。少人数の子どもどうしの活動形態を用いることにより、発話の機会が増え、教え合い、励まし合って、自分たちだけで学ぶこともできた。「Ａちゃんが『いっしょに質問しよう！』って言ってくれたのがうれしかった」「友達が言い方を教えてくれた」という感想にもあるように、子どもは、友達といっしょに活動できることを望み、ふれあえたことで英語活動への意欲を持ち、頑張ることがわかった。

しかし、一方で十分には楽しめないグループもあった。グループ構成にも配慮するなど、子どもたちがリラックスし、自ら進んで活動できるような雰囲気作りの重要性を感じた。

(ｳ)　視聴覚教材等の効果的な利用

ビデオテープや DVD、CD などの視聴覚教材は、英語特有の発音やリズムを楽しませるのに効果がある。今回、「聞き取り」の学習として、「The Black Cat Song」の歌を聞きながら、聞こえた色をシートに塗っていく活動を行った。この教材は子どもにとって身近な色と単語のみで構成されているため、活動に取り組みやすかったようである。「聞く」ことが苦手な子どもたちであったが、集中して真剣に取り組む姿が見られた。子どもたちは知っているカタカナ語が英語の発音とは違うことに驚き、興味を持って聞いていた。「聞いて色塗りをする活動がおもしろかった」という感想もあり、工夫することにより英語という違った音への興味付けができた。このように目的意識を持たせて視聴覚教材を利用することで、担任のみの指導でも楽しみながら英語の発音に慣れさせることができる。

小学３年生の発達段階を考慮し、チャンツを取り入れた。その結果、手拍子なしで英語をリピートするよりも、英語表現の定着が早いことがわかった。英語を話す際には、リズムや強弱が大切である。文字を介さない音声中心の英語活動では、

単語ごとに区切って読んでしまうことがなく､自然なイントネーションで英語表現を丸ごと覚えられることを実感した。

イ　英語を使おうとする意欲や態度を育てることができたか

(ｱ)　自己表現やコミュニケーションの手段としての英語使用

できるだけ身近な英語や自分の表現したい英語を話せるように“I（You)”を主語とした表現を中心に取り扱った。話す内容は簡単でも、自分の思いを表現すれば、伝わるおもしろさや、わかってもらえる満足感を英語を通して得ることができる。自己表現することにより、英語を身近に感じ、自分の思いを伝えようと工夫する中で、意欲を持って取り組む姿勢が育つことが実感できた。

第３時の虫の好き嫌いをたずねるインタビュー活動では、子どもたちは嫌悪の表情を見せながら質問に答えたり、意外な顔をして聞き返したりすることがあった。簡単な表現であったが、英語を使ってコミュニケーションをする姿が印象的であった。「もっといっぱい英語を知って、みんなで話したいです」「いろんな人と話ができてよかったです」という感想から、子どもが英語を覚えて話そうとするのは、主として英語を使って友達とコミュニケーションをしたいためであると考えられる。

活動名	「とても楽しい」と答えた子どもの割合
クイズビンゴ	100%
フルーツバスケット	96%
「私は何でしょう」	95%
「私は誰でしょう」	95%
カード集めゲーム	95%

表１ 子どもに人気のあったコミュニケーション活動

教室で日本人どうしが英語を使って話すことには一見必然性は少ないように思われる。しかし、英語を友達と遊ぶための道具や手段とすることで、英語によるコミュニケーションが、子どもたちにとっては十分必然性のあることになる。表１はコミュニケーション活動の中で特に人気があったものの一覧である。これらの共通点として、ゲーム性があり、相手からの情報を取り入れるために英語を使うことが挙げられる。友達とこのような活動をしたいために、指導者の英語を熱心に聞いたりリピート練習を繰り返し要求したりする姿も見られ、活動をすることにより子どもたちの意欲が高まることを感じた。

コミュニケーション活動の一つである問題作りの活動を２回行った。表２はその結果である。１回目には班のグループで、洋服の色と種類を組み合わせてヒントを作った。２回目にはペアで、今までに習った色、動き、好みや様子を表す言葉を使ってヒントを作る、というように、少し難易度を上げた活動を行った。

学習形態	とても楽しかった	まあまあ楽しかった	あまり楽しくなかった
１回目（班のグループ）	86%	9%	5%
２回目（ペア）	95%	5%	0%

表２　問題作り活動に対する意識の変化

１回目は､「あまり楽しくなかった」と答えた子どもが５％いたのが２回目は０％となった。逆に「とても楽しかった」と答えた子どもは、86%から95%に増えている（表2)。この要因として、２回目は子どもたちも活動に慣れたことが考えられる。もう一つの要因としてグループの人数が挙げられるであろう。グループの人数が多いほどヒントを作る際に自分の意見が通りにくい。しかし、２人なら自分の表現したいことが言いやすく､「自分で作れた」という成就感が得られることも大きな要因だと考えられる。自己表現できるということは、子どもが積極的に学習に取り組む上で重要なポイントである。

「クイズを出して、みんながわかってくれたことがうれしかった」や「みんなで楽しく活動できた」という感想から、自分の表現したものが伝わった喜びや友達といっしょに英語活動を楽しめた満足感が窺える。さらに「またクイズをしたい。けどもうできないから、家でやってみようかな」といった英語活動への強い意欲が感じられる感想も見られた。このように、表現する方も聞く方も満足感を得られるという点で、問題作り活動は有効である。

(ｲ)　ワークシートの活用

活動の際には、ワークシートを活用し、子どもの意欲を高めるようにした。ワークシートは､指導者のみならず子ども自身にとっても活動量を知る目安となり、励みになったようである。「みんなと話せたことが楽しかった。５ビンゴになって楽しかった」「ビンゴゲームで、全部ビンゴになったのがうれしかった」という感想からわかるように、活動を意欲的に続けることができた。

また、指導者が子ども一人ひとりと対話し、個別に観察を行った際に、子どもが進んで話せたときにはシールをシートの右端に、支援を受けて話せた時には、シートの真ん中に貼るようにした。ワークシートを用いたことにより、活動の記録を短時間で確実に残すことができ、個々の子どもたちの意欲を把握できた。

(ｳ)　ネイティヴ・スピーカーとのふれあい

始めは英語活動に興味を持てなかった子どもが、授業終了後のアンケートには、「ALT といっしょに勉強できて楽しかった。またしたい」「ALT がいるからこれからも英語活動がしたい」という感想を残すなど、気持ちの変化を見せている。このことから、ネイティヴ・スピーカーとのふれあい（写真２）が、子どもたちの学習意欲を高めていくことが実感できた。全体を見ても、楽しく活動できた理由に、ネイティヴ・スピーカーといっしょに活動したことを一番に挙げる子どももおり、ALT との TT は効果的であると感じた。

写真２　ＡＬＴとの出会い

第５時の「私は誰でしょう」の活動では、日本語のわからない ALT のために、子どもたちが英語を使って、色や衣服についての情報を伝える場面を設定した。子どもたちは、自分の知った英語を使って懸命に ALT に伝えようとし、伝わった時には大きな満足感を得ることができた。今、自分が持っている力を最大限活用し、コミュニケーションをしようとする意欲や態度を育てる、このことこそ、今回の研究テーマでねらってきたものである。

「異文化理解」の場面作りや、ネイティヴ・スピーカーの英語を聞く場の設定、担任とのデモンストレーションの設定など、ALT の良さを生かした TT を行うことで、子どもの意欲を喚起し、授業を効果的に進めることができた。

(2)　評価活動が子どもの学習意欲の向上に生かされたかをふりかえる

子どもはどの活動に意欲を持ったか、また授業の進め方で改善すべき点はどこかを把握するために、次のように評価を工夫し、実施した。その結果から、子どもの英語活動に対する意欲を育てることができたかを考察する。

ア　個別の観察評価

活動の終わりに、子どもの英語を使うことへの意欲を見るために、指導者が一人ひとりと対話する中で、個別の評価活動を行った。これにより全員の評価が適切に行えた。今回の評価を見ると、意欲は高く、全員がおおむね満足できるものであった。子どもの学習状況を見ることや、励まして意欲付けを行うこととともに、つまずきを把握した場合には、間違いを訂正することができたことは収穫であった。

イ　自己評価

活動の終わりに「イングリッシュカード（図１）」を用いて実施した。毎時間、自己評価を行うことにより、子ども自身が自分の学びをふりかえることができ、英語活動への意欲を増すことができた。また指導者にとっても、個々の子どもの変化を把握するのに役立った。子どもの意欲が低くなってきた活動やつまずいている箇所を見出した時には、その都度、次時の授業についての工夫、改善をすることができた。このように子どもの実態を見ながら活動の方法を工夫し、柔軟に対応していくことによって、無理なく楽しい授業を行うことができた。またこういった自己評価を生かすことにより、子どもの実態に応じたカリキュラム作りが可能となる。

ウ　他者評価

他者評価は、主にグループでの問題作りの際に行った。「Ｂさんのヒントの出し方がとってもよかったです」「Ｃ班の問題の言い方がすごくよかった」「Ｄ君とＥ君は問題をつくるのが上手だった」と、互いの活動を認め合うことができている。友達を認める中で、自分自身についても「自分でわかったことがうれしかった」「問題を出して上手に言えてよかった」「はじめての時よりしゃべれるようになったと思います」と肯定的にとらえる感想が多く見られるようになってきた。

子どもたちはこのように感じることで、自分の英語に自信を持ち、より多くの英語を知って色んな活動の中で使ってみようとする意欲をさらに強めた。

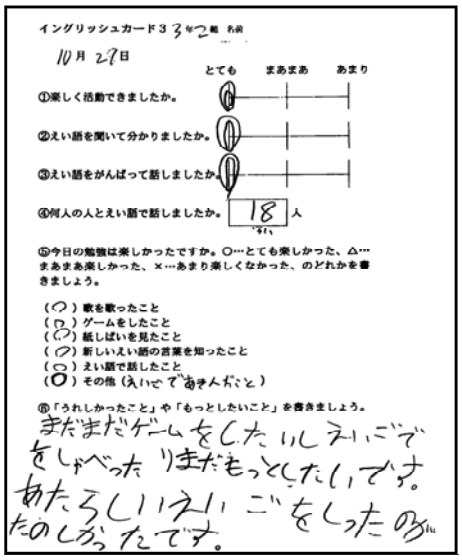

図１　イングリッシュ（ふりかえり）カード例

(3)　英語活動に対する子どもの意識がどう変化したかをふりかえる

事前調査で「英語活動をしたい」と答えた子どもの割合は95％であった。この数字より授業の実施前から、子どもたちの英語活動への期待の高さが窺えた。一方「したくない」と答えた子どもの具体的理由は「難しそうだから」「つまらなそうだから」「中学校ですればいいと思うから」「勉強することが増えるとしんどいから」「外国の人と話をすることはないと思うから」といったものであった（表３参照）。

小学校で英語活動をしたい	77人　（95％）	小学校で英語活動をしたくない	４人（５％）
その理由		その理由	
外国の人と話がしたいから	47人　（61％）	難しそうだから	３人　（４％）
楽しそうだから	43人　（56％）	つまらなそうだから	２人　（３％）
中学校の英語の勉強に役立つから	35人　（45％）	勉強することが増えるとしんどいから	２人　（３％）
将来、仕事や旅行で役立ちそうだから	32人　（42％）	中学校ですればいいと思うから	１人　（１％）
英語が話せるとかっこうがいいから	11人　（14％）	外国の人と話をすることはないと思うから	１人　（１％）

表３　英語活動の希望の有無及びその理由（事前調査・81人実施　複数回答あり）

また初めての英語活動に対して不安を持つ子どもも多く、事前調査では全体の68％の子どもが「上手に話すこと」、31％の子どもが「難しさ」についてそれぞれ不安を持っていた。これらの不安を取り除いていくことが英語活動への意欲を持続する鍵である。

「話すこと」への抵抗は授業を重ねていくと減り、子どもたちが特に興味を持って取り組んだ活動（「クイズビンゴ」や「What am I?ゲーム」の問題作り）の時には「英語で話したこと」をとても楽しいと感じた子どもの割合は95％に上っている。また、理解の度合いについては「英語を聞いてわかりましたか」という問いに対して、「とてもわかった」と答える子どもの割合が、回を追うごとに増えている(図２)。11月４日の授業で理解度がやや低下したのは、これが ALT との TT の授業であり、この時 ALT の話す英語を全て理解しなければならないと感じた子もいたためであろう。

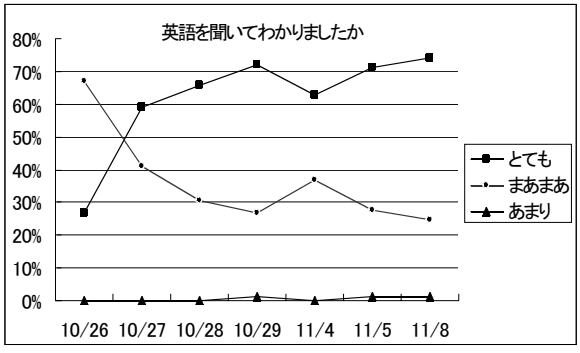

図２　理解の度合いの変化

英語活動を進めるにつれて、英語に慣れ、理解の度合いが高まることによって、子どもの英語活動への不安感が取り除かれたと考えられる。また、他教科と関連のある理解しやすい教材や子どもにとって親しみのもてる教材を用いたことや色々な工夫を加えた楽しい活動を導入したことも、英語活動への意欲を持続させるうえで有効であった。

英語活動への心配については、図３に示すように、「心配がない」と答えた子どもは事

前調査では22%であったが、事後調査では90%となっている。「思ったように話せなかった」「思っていたよりも難しかった」という項目を選んだ子どもの中には、指導者と直接対話する場面で、よく話せていた子どももいた。反対に、支援を受けながら話した子どもでも、「思ったように話せた」と評価している場合があった。これは子ども自身の「英語を話したい」という気持ちが強く、支援を受けてすぐに活動に参加することを続けていくうちに満足感が大きくなったためであると考えられる。

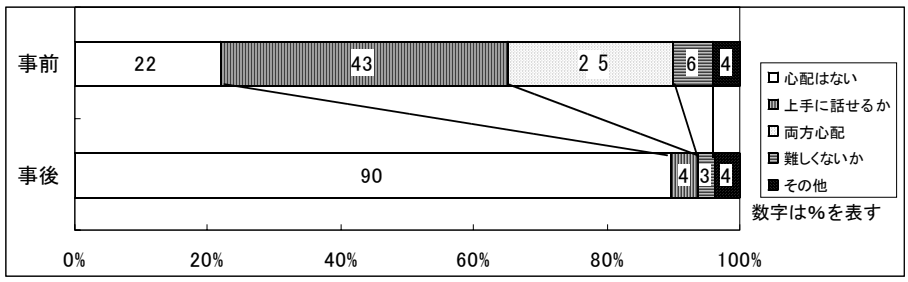

図３　心配していたことはどうなったか　（複数回答あり）

授業後の自己評価で、うれしかったこととして、「ゲームが楽しかったこと」と並んで「英語が話せたこと」という声が多かった。子どもにとって一番の関心はやはり、「英語で話す」ことであり、「楽しいこと」と並んで「英語が使えるようになること」を英語活動を行う意義と感じているのであろう。

結果として、事後調査で「これからも小学校で英語がしたい」と答えた子どもの割合は99%となった。この数字から英語活動への高い意欲が窺える。授業後の子どもの感想には、「やったことを忘れないようにしたい」「３、４時間目も続けて英語をしたいよ」「もっと英語の授業の時間があったらいいな」と英語活動への意欲を示すものが多く見られた。

子どもたちは、遊びの要素があり、いろいろな活動を友達といっしょに行うことができ、力が付いたことが実感できる英語活動を楽しいと感じていた。このように、実施前に期待していた通りのアンケート結果（表４参照）が読み取れたことは興味深かった。

・活動が楽しかったから：34人(44%)	・(英語を)覚えられたから：16人(21%)
・みんなでできたから：12人(16%)	・いろいろな活動ができたから：８人(10%)
・外国の方（ALT）とのふれあいができたから：７人(９%)	・遊べたから：３人(４%)

表４　英語活動が楽しかった理由（事後調査・複数回答あり）

英語活動後には「ゲームとかクイズとかで、英語を学べたから楽しかった」「英語をいつの間にか覚えていたことがうれしかった」という感想や、「英語は楽しそうだから、すぐ覚えられるかも」という期待の声が多数あった。このような子どもたちの声を大切にし、活動を楽しみながら、力を付けていける英語活動をさらに発展させていく必要があろう。

５　研究のまとめ

(1)　検証授業での取り組みと成果

発達段階に応じたカリキュラムを作り、教材や活動を工夫することにより、子どもたちは楽しみながら英語を使おうとし、英語活動に対する意欲を持つことができた。

今回行った工夫は次の通りである。

・他教科との関連を図り、また自己表現を重視した教材を使用する。
・紙芝居の読み聞かせとゲームなどのように、様々な活動を組み合わせたヴァリエーションの工夫により、興味・関心を持続させる。
・言語活動を促すよう、グループ活動やペア活動を取り入れる。
・英語の音に慣れ親しむため、視聴覚教材を効果的に活用し、チャンツを取り入れる。
・自己表現やコミュニケーションの手段としての英語使用の場を設定する。
・ワークシートを効果的に活用し、活動の意欲を高める。
・ネイティヴ・スピーカーとのふれあいの中で、英語を使う必然性や意欲を高める。

・個別の観察評価や、自己評価をもとに、授業改善を行う。

(2)　検証授業からわかったこと

検証授業全体を通して、子どもたちにはやや難易度の高い活動のほうが人気があった。難しいことをすることが、「わからない」や「楽しくない」といったことに必ずしもつながるものではない。子どもは易しいことの繰り返しでは飽きてくるため、意欲を持続させるには、ある程度負荷をかけながら新しい物に挑戦させていくことが必要な場合もある。発達段階に応じ、知的好奇心に訴えるようなカリキュラムを作ることは、子どもたちをもっともよく理解している担任の仕事であり、子どもの実態や興味・関心に基づいた活動及び教材教具を工夫、改善していくことが必要である。

(3)　今後の課題

今後は、興味・関心を育てることを英語活動のねらいの中心にしながら、同時に、表現する力や理解する力を育てることも考えたい。小学校における英語活動は、「言語習得を主な目的とするのではない（※）」ものであるが、子どもたちは英語を覚えることで活動を楽しんだり、自信をつけたりすることができた。英語活動へのさらなる意欲を持ち、英語を使ってみようとする態度を育成するためには、基本的な言語材料の定着も必要なことであろう。この点については復習を重ねることにより、補っていけると思われる。学んだことが、自然に口をついて出てくるように様々な活動を工夫し、復習できるようにしたい。

(4)　おわりに

小学校英語活動の段階では、知っている英語表現の少なさからコミュニケーション活動はかなり限定されたものとなる。しかし、適切に選ばれた言語材料を使ってのコミュニケーション活動であるからこそ、基本的なことだけで、自分の意思を伝えることができるという良さがある。小学生の時期は相手に「とにかく伝えたい」「わかってもらいたい」という態度を比較的素直に出しやすい。この時期に英語活動を始めることは、コミュニケーションへの積極的な態度を育てやすいという点で大きな意味があるように感じられる。相手に伝えたり、相手から聞いたりすることを体験し、通じたことから喜びや満足感が得られる。その結果として、これからの英語活用や中学校以降の学習への意欲が育っていくと考えられる。

平成15年度に英語活動を実施した和歌山県内の公立小学校の割合は94.3％と、全国の88.3％を上回り、かなり定着しているように見える。しかし、その実施時間数は年間１～11時間の学校が大半を占めている。指導形態も ALT の主導によるものが主流であることからも、実際にはまだほとんどの学校が手探り状態であるといえる。

英語活動は始まったばかりで、小学校の担任にとっても未知の部分が多く、これからも研究の余地がある。今後は、体系化したカリキュラムと工夫をこらした教材作りを通し、コミュニケーション能力の育成とともに、子どもたちが興味・関心を持ち、中学校以降の学習にスムーズに入っていけることを視野に入れた小学校英語活動を創っていきたい。

＜注釈＞

注１　手拍子に合わせ､リズムにのって英語を言うこと。

注２　全国市町村国際文化研修所 小学校における総合的な学習：国際理解（英語）コース(2004年7月30日)のシンポジウムの壇上で発言される。

＜引用文献＞

※　文部科学省　『小学校英語活動実践の手引』ｐ３　開隆堂出版　(2001)

＜参考文献＞

・文部科学省　『小学校学習指導要領』　国立印刷局　(1999)
・河合隼雄　『こころの子育て（誕生から思春期までの４８章)』　朝日新聞社出版(2000)
・文部科学省　『小学校英語活動実践の手引』　開隆堂出版　(2001)
・松川禮子編著　『小学校英語活動を創る』　高陵社書店　(2003)
・松川禮子編著　『明日の小学校英語教育を拓く』　アプリコット　(2004)
・和歌山県教育委員会『学校教育指導の方針と重点』　(2004)